

●マイハート NEW!		
◇一步踏み込む勇気を!!	角田信朗……	3
●連載／教育のひろば		
◇江戸の「道徳力」	大石 学……	4
●特集／新学習指導要領を考える		
◇対談：新学習指導要領を読み解く	押谷由夫&土田雄一……	6
◇“人間の教育”としての道徳教育	新宮弘識……	12
◇人間教育が再認識された改訂	竹井秀文……	14
●新連載／実践報告＋講評と助言 NEW!		
◇実践報告：人の生き方に学ぶ道徳授業の実践	三浦貴子……	16
◇講評と助言：生き方に学ぶということ	上杉賢士……	19
●新連載／実践 子どもの目が変わる NEW!		
◇授業を変えるスパイス	立川修司……	20
●連載／道徳のチカラ		
◇道徳の時間を変える①	土田雄一……	22
●道徳教育への期待		
◇道徳教育とは生き方の教育	北川 忠……	24
●道徳教育の取り組み		
◇家庭と連携して行う道徳教育	江藤幸恵……	25
●連載／こころの行方		
◇言葉の本当の意味	市川宏伸……	26
●新連載／子どもに“思わず”話したくなる NEW!		
◇心に残るひとこと	加藤宣行……	27

本文中の勤務校は平成20年4月1日現在のものです。

●著者プロフィール●

大石 学先生▶今日、世界化（グローバル・スタンダード）への対応を名目に、教育界を含めて規制緩和（自由化・競争化）が進められ、格差社会の到来が指摘されている。江戸時代以来の日本型社会システムが崩壊する意味を、江戸時代の視点から考えている。

押谷由夫先生▶文部科学省から昭和女子大学に移って7年目を迎えます。学習指導要領の改訂で道徳の教科論が議論されたのは初めてです。大きな進歩だと思います。

新宮弘識先生▶親しい友人が、北九州の大学の理事になる。彼は、常に学生の方を向いていた。国民や消費者のことを忘れた政治家や経営者等が多い中、彼のような人間が評価されたことがうれしい。

竹井秀文先生▶岐阜に住んでいますが、実は九州男児。道徳教育を熱心で研究中です。テーマは「生活の中にある学ぶべき道徳性を教え、自己の生き方を高めようとする力を育てる道徳授業」です。まだまだ若輩者ですが、子どもたちとともに道徳を通して「生きる」ことの素晴らしさを実感中です。全国の皆様!! ぜひ岐阜にもお越しください!!

三浦貴子先生▶1年間、千葉県長期研修生として、千葉大学大学院・上杉賢士教授のもとで、「人の生き方に学ぶ道徳の授業」において【生き方に影響を及ぼす学びの環境構成】をどのようにしたらいいのかが研究してまいりました。4月からは現場に戻り、この研究を生かし、子どもたちと共に命や生き方について思い切り語り合いたいと思っています。

上杉賢士先生▶昨年からの続いた世界12か国の教育事情の紹介番組の作成終了。そこから得られた結論の一つは、「制度を整えてもできないことがある」ということ。教育は結局、教師の実力に支えられるということです。

立川修司先生▶自分の運動不足を何とかしなくてはという思いをもちつつ、新しく始まったプロバスケットボールリーグの試合観戦に熱中しています。攻守の展開の速いスピード感あふれるプレーを見る爽快感は、また格別です。

土田雄一先生▶今回は「道徳の時間を変える」ということで「デジカメの活用」の話にしました。積み重ねが必要なので、第1回にしたのです。次回は「ウェビングの活用」の予定です。板書は「使いやすさを広めたい」(NHK「道徳ドキュメント」)の板書です。4年生の授業でした。

北川 忠先生▶沈丁花が大好きです。小さな花が集まって咲く姿もかわいいのですが、花よりも香りでその存在感をアピールするところが好きです。生命力が強いところも素晴らしい。このような人になりたいです。

江藤幸恵先生▶昨年4月、突然市立幼稚園の園長になった。教師がかかわることによって、自分でできることが増え、人とかかわり方を学んでいく子どもたちの姿には、目を見張るものがあった。幼稚園での教育の重要性を目の当たりにした1年であった。

加藤宣行先生▶私の学校では、担任する学級を3年間もち上がります。今年度がその3年目。締めくくりの年です。3年間、道徳を通して学級経営をしてきた総決算。最終的にどんな子どもたちが育つか、本当に楽しみです。

■「子どもの道徳」へのご意見・ご感想をお寄せください。



一步踏み込む勇気を!!

正道会館空手最高師範
K-1 競技統括プロデューサー

角田 信朗



道徳というのは、学校教育の中で一番難しいですよ。学校で教えるというよりは、まず家庭でやるべきことだと思います。

「最近の子どもは……」とよく言われますが、「最近の大人は……」だと思うんです。子どもにおかしな情報を与えるのは、わたしたち大人なんだと思いますね。子どもを教育する前に大人を教育して、大人が変わっていかないと、どうしようもない世の中だと思います。

子どもというのは、大人がやらせようとしたことに対して120%反発して、大人がやってはダメだと止めたことは陰でコソコソとやります。だから、僕はそれを逆手にとって、やらせたいことほど「やるな、やるな」と邪魔をし、やらせたくないことは「やれ、やれ」と推奨します。もちろん、百発百中とはいかない場合もあります。「ほんまにやりやがって、このボケ!」と思うこともあるし、「ほんまにやらへんな」ということもあります。ただ、そこで、「やるな、やるな」と言っておきながら、ほんとにやらないからダメだではなく、子どもたちがコソッとやるための仕掛けみたいなものはいくつも作っておくんです。

この『子どもの道徳』という冊子のタイトルは、イコール“大人の道徳”ですよ。子どもにとっては、日常生活で見せている会話、上司に対する愚痴、夫婦喧嘩など、親がやったことがすべてルールですから。子どもはそれが正しいか間違っているかじゃなくて、それを自分たちのルールだと受け止めてしまうと思うんです。

僕の独自の理論なので、賛否両論あると思いますが、例えば、先生は子どものためにと思ってやっているから辛いのではないのでしょうか。人のためにというけれど、漢字で書けば「人の為」で「偽」となりますよね。人のためには頑張れないですよ。人のためにやっていると思うと頑張れないけれども、自分のためにやっていると思えば頑張れるのではないですか。難しい問題に正面から

取り組んで、これを解決できたときに、「その人が……」じゃなくて自分が人間としてワンランクアップしたと思えると、これが自信になり、子どものために頑張れるんじゃないでしょうか。結果として、自分のために頑張ったことが他人にとってプラスになるというのが理想だと思います。

世の中には、公私ともにいろいろな問題がたくさんありますよね。その問題に対して、最初は嫌だなあとか面倒だなあと感じるがあると思います。格闘技の世界では、攻められて逃げにまわったら、どんどん攻められるんですよ。そこで一歩前へ出ると、意外とダメージがなかったり、形勢が逆転したり、相手がひるんだりするんです。宮本武蔵の「刃の下は地獄なれど、一歩踏み込めば極楽あり」と同じで、嫌なことに背を向けているかぎりどんどんストレスが溜まっていき、結果が出せないんです。まず最初に一歩踏み込む勇気をもつことによって、嫌なことに立ち向かえるようになると思うんです。僕は格闘技をやっていて何が身についたかといったら、腕力とかではなく、“一歩をためらわずに踏み込める勇気”だと思います。

人のためには頑張れないかもしれないけど、自分のためであつたら、どんなに難しいことにでも自分から飛び込んでいく。火中の栗を拾いにいく、という姿勢が物事を打開してきたし、自分をどんどんレベルアップさせてきたなと思うんです。先生方もこんなふうに関き直って、不退転の決意で子どもたちを立派に教育してもらいたいなと思います。そのために、「何のために学校行かせているんですか」「先生方は何をやっているんですか」と先生に任せっきりでなくて、我々は親としてやらなければいけないことを120%取り組んでいきたいなと思います。(談)

1961年大阪府生まれ。その活躍は格闘界だけでなく、TV、雑誌、映画など多方面にわたる。著書には『くやしかったらやってみい!!』(幻冬舎)などがある。

—江戸の「道徳力」—

東京学芸大学教授 大石 学



時代劇の変化

私は、この10年ほど、NHKの時代劇や大河ドラマ、映画などの時代考証の仕事にかかわっている。その中で、時代劇の変化を実感している。すなわち、かつて時代劇は、勧善懲悪観にもとづき、正義の主人公が多く、悪人に囲まれながらも、次々と悪人を斬り倒し、返り血一つ浴びずに去っていくというのが定番であった。剣術・剣法の様式美の世界でもあった。

しかし、近年の時代劇は、たとえば時代劇の「御宿かわせみ」(原作・平岩弓枝)、「慶次郎縁側日記」(北原亜以子)、「蟬しぐれ」(藤沢周平)などに見られるように、中心テーマは勧善懲悪や斬り合いではなく、人と人、人と家族、人と組織・社会などの関係におかれている。大河ドラマ「新選組!」や「篤姫」なども、若者たちの友情や、親子・夫婦間の愛情を中心に据え、幕末の時代を描いている。近年の時代劇は、チャンバラ抜きで成立するようになったのである。

考えてみると、江戸時代は年中、斬り合いをしていたわけではない。武士が帯刀していたことから、ともすると日常的に斬り合いや切り捨て御免が行われた時代と考えられがちである。しかし、今日残されている記録や史料を見ても、斬り合いの記事はそう多くはない。もし斬り合いなどが起ければ、江戸中のニュースになるほどであった。

抜刀しない武士

来日外国人たちは、江戸時代の武士について、さまざまな記述を残している。たとえば、1853年にペリーとともに来日し、60年のプロイセンの東アジア遠征のさいに再来日したドイツ系アメリカ人の画家ヴィルヘルム・ハイネは、「刀を使用す

ることは、戦争のとき以外は厳しく禁じられている……警察官は、刀のほか、把手のついた短い棒(十手)を持っている。これで抵抗する犯人が手にする武器をたたきおとすのである」(『ハイネ世界周航日本への旅』雄松堂出版)と、刀は戦争用であり、警察官は犯人逮捕のさいに十手でたたきおとすと述べ、1859年、61年、63年の3度来日したプロイセン生まれの外交官ルドルフ・リンダウは、「日本という国は、あらゆる文明国の中でも、武器を持つ習慣が最も広まっている国であるので、その危険な習慣の不都合を出来るかぎり避けるために、厳しい規制を採用せざるを得なかった。正当防衛以外の場合でなければ、路上で何人も刀をぬけば、決まってこの上なく重い罪に問われるのである……槍の穂先、銃の銃口さえもが丁寧に、鞘に包まれているのは、平和時に、なんなれと武器を人の目に曝すことを禁じている厳しい禁止命令のためなのである。敵国に遠征するときにはしか鞘は外されないのである」(『スイス領事の見た幕末日本』新人物往来社)と、武器使用の厳しい規制を指摘している。また、1866年から67年にかけて滞日したフランス海軍士官のデンマーク人エドワード・スエンソンは、武士の帯刀について、「緊要な時以外には決して鞘から抜かれることもなく……帯刀した者たちの間で流血事件が起きたと耳にするのはめったになく」(『江戸幕末滞在記』新人物往来社)と、斬り合いの少なさを述べている。

たとえば、今日拳銃を携帯している警察官が、定年までの在職中に事件に遭遇して発砲する回数と、江戸時代の武士が一生のうちに刀を抜いて斬り結ぶ回数とは、それほど変わらないかもしれない。

江戸時代、殺人事件が起けると、役人が出張し、現場検証や聞き込みを行い、報告書を作成する。

指名手配書を公開することもある。犯人が逮捕されると、裁判が行われて刑が確定する。人が一人死ぬことは、現在と同じくらい重い出来事だったのである。

チャンバラだけで江戸時代をイメージすると、実態を見失うことになりかねない。

帯刀の意味

では、帯刀の意味とは何であったのか。これについて、1775年から76年にかけて来日したスウェーデン人の植物学者カール・ペーテル・ツンベルクは、「幕府の役人は同じような二本の刀を携えている。うち一本は本人のもの、もう一本はお役目の刀と呼ばれ、そちらの方が長いのが常である」(『江戸参府随日記』平凡社東洋文庫)と、大刀は役人の身分表象であると述べ、1862年来日したフランス人モンブランは、「長い刀は戦いの武器で……短い刀は自殺用の武器である」(『モンブランの日本見聞記』新人物往来社)と、大刀は武器、小刀は自殺用としている。1779年から85年にかけて3度来日しオランダ商館長を務めたオランダ人イザーク・ティチングは、「すべて死よりも恐ろしい不名誉に陥ることを避けるためには、常に自殺のための道具を手許に用意しておくことが絶対に必要なことである」(『日本風俗図誌』雄松堂書店)と、小刀を名誉を守るための自殺の道具としている。

武士の大刀は役目・戦争用であり、小刀は自殺用であった。町中で使用することはほとんどなかったのである。

安全な社会

このように、江戸社会は平和(安全)な社会であった。そして、この平和を基礎から支えたのが、国民的規模での「江戸の道徳力」(規範・モラル)であった。かつて私は、江戸時代の教育が、地域や身分を越えて国民的規模で普及・発達し、この時代の「平和」と「文明化」を推進する一方、近代日本の基盤となった意義を「江戸の教育力」と表現した(大石学『江戸の教育力—近代日本の知的基盤—』東京学芸大学出版会、2007)。「江戸の道徳力」は、この「江戸の教育力」の成果の1つといえる。

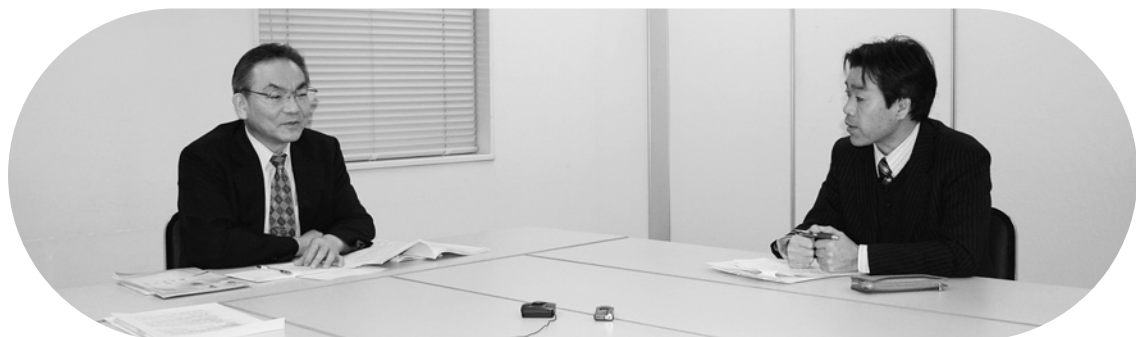
「江戸の道徳力」の実態の一端を、これも来日

外国人たちの記録をみると、たとえば1690年から92年まで滞日したオランダ商館医のドイツ人エンゲルベルト・ケンペルは、「世界中のいかなる国民でも、礼儀という点で日本人にまさるものはない。のみならず彼らの行状は、身分の低い百姓から最も身分の高い大名に至るまで大へん礼儀正しいので、われわれは国全体を礼儀作法を教える高等学校と呼んでもよからう」(『江戸参府旅行日記』平凡社東洋文庫)と、日本国民の礼儀正しさを評価している。また先のツンベルクは、「日本の倫理は数条の簡単明瞭な守則があるのみである。そして日本人はこの守則を実践するに努力するのである。宗教各派もその基礎観念としてこの守則を認めていて、且つこれと不可離のものと思っている」(『ツンベルク日本紀行』雄松堂書店)と、倫理(道徳規範)が宗教に優越することを述べ、「国民は大変に寛容でしかも善良である……正直と忠実、国中に見られる。そしてこの国ほど盗みの少ない国はほとんどないであろう。強奪はまったくない。窃盗はごく稀に耳にするだけである。それでヨーロッパ人は幕府への旅の間も、まったく安心して自分が携帯している荷物にほとんど注意を払わない」(『江戸参府随日記』)と、寛容、正義、正直、さらには治安の良さを記している。

さらに、1852年から62年まで滞日したドイツ公使オイレンブルクの部下で画家のベルク著とされる記録には、「日本人は、同胞のみならず外国人に対してもていねいかつ親切で、礼儀正しく控え目に振舞い、また喜びに満ち、情愛があり……悪い行状や粗暴はめったに見られない。市民の婦人や娘は、しつけがよくしかも天真爛漫である。夫は妻にやさしく、しかも尊敬をもって接し、ことに子どもの扱いはきわめて細心かつ情愛に満ちたものである」(『オイレンブルク日本遠征記』雄松堂書店)と記されている。

先の抜刀しない武士とあわせて、「平和」で「文明的」な江戸社会が見えてくる。「江戸の道徳力」が、国家規模での日本の「平和」「文明化」を達成したとするならば、「現代の道徳力」が求められるのは、「世界の平和・文明化」への寄与であろう。このさい「道徳」は「市民性」「公共性」と表現されてよいかもしれない。「江戸の道徳力」を考察する意義は、決して小さくないのである。

対談：新学習指導要領を読み解く



●出席● 昭和女子大学教授 押谷 由夫
千葉大学准教授 土田 雄一

◆学習指導要領の改訂で道徳は変わるか

土田 今回の学習指導要領の改訂は、教育基本法が改正され、それを受けたいえでの改訂でした。注目度も高く、また、「道徳の教科化」など、心の教育に力を入れなければいけないという世論の中で、かなり道徳教育の改善についての関心が高まっていたと私自身は受け止めておりました。しかし、内容からすると、一見、それほど大きな変化はないように見え、多少がっかりした面もあったのですが、押谷先生のご感想・ご意見をおうかがいできればと思います。

押谷 改正教育基本法の趣旨をいかに教育課程で具体化するかというのが今回の改訂のいちばんの柱であるわけですから、当然、道徳教育は重視されるということですね。では、どう重視されるのかということですが、どうも見えにくいです。もう少し枠組みを変えて特別教科にするとか、道徳の時間を2時間にするとか、加配で道徳の推進教師を配置するとか、あるいは、教科書は作らないけれども、補助金を出すとか、もっと明確な改善案を出していかないと道徳教育がいっそう重視されているという意識がもてません。議論の後半で、補助教材等にかかわっては何かの財政的援助があるなどと報道され、マスコミも道徳教育が重視されている旨を報道するようになりました。今回の改訂では、要するに目標や内容のレベルで見る

と、そう目に見える大きな変化というのはありませんでしたね。

土田 そうですね。4つの柱は変わりませんし、その柱の枠組みを変えられるかどうかという議論でした。

◆各教科での道徳指導を明記

押谷 改革的な提案はなかったわけですが、実は、改訂の全体を見てみますと、たいへん大きな変化もあるのです。それは、全教育活動を通して道徳教育を充実させるという部分です。例えば、小・中学校とも共通して、学習指導要領の各教科等の「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中に、国語科ですと、「第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、国語科の特質に応じて適切な指導をすること」という文言が入っています。算数科においては、最後のところが「算数科の特質に応じて」となっているのですね。各教科等で「道徳教育をやりますよ」ということがここにはっきりと明記されています。そしてさらに、「第3章 道徳」の「2 内容」においても、リード文で、道徳の内容は、「道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う」ことが書かれています。

また、改正教育基本法との関係で見ますと、私

は「人格の完成」というのがたいへん大きなキーワードだと思います。その「人格」にかかわっていちばん大切なのは、道徳的価値意識をしっかりと育んでいくことです。このことでいえば、「第3章 道徳」の「1 目標」の中で、「自己の生き方についての考えを深め」とか、「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、自分を振り返るとか、あるいは書くことを通して自分の成長を実感できるようにするとか、単に、道徳の価値の学習をするだけではなく、そのことを通して、自己形成をしっかりと行っているようにしていくということが強調されています。

土田 各教科において道徳的な指導をどのように行うか、また、教科の特質を生かした道徳の指導をどうするかということが今後の課題になりますね。

押谷 各教科における道徳教育が、このような趣旨を生かす形で行われたとしたら、道徳教育の全体が大きく変わってきます。それをふまえて道徳の時間をどう充実させていくかが課題になります。そのためには、特に重点的な指導において、いろいろな教育活動との関連をもたせながら、要としての道徳の時間が生きてはたらくような指導計画が求められます。そのことが、学習指導要領では提案されています。

土田 この点につきましては、各教科にもからんでくることですね。

押谷 道徳教育は、各教科等の特質に応じて行うことが大前提であって、それとの関連で道徳の時間が成り立ち、要の役割を果たすわけです。そういう意味から、各教科等における道徳教育をどう充実させるかということが大事です。最初は、各教科になぜこのような道徳教育のことが書かれているのかと思われるでしょうが、それを真摯に受け止め、それぞれの教科等で道徳教育がどのようにできるのかを真剣に検討していけば、ものすごく変わってくると思いますね。

土田 それは、例えば国語科の人たちが道徳を考えるものなのか、道徳の人たちが国語教育の中の道徳を考えるのかということなのですか。

押谷 双方で考えていかなければいけないと思います。私が各教科の道徳教育についてよく申し上げるのは、いわゆる「関心・意欲」をどういう形で喚起していくかということです。まず一つは、

教科の目標にかかわってそれに対する関心を高めていく。例えば国語科であれば、言葉の理解・表現にかかわって興味をもって追求していける、そして言語事項についてもしっかりとおさえをしながら読み取ることができるということがありますね。しかし、それだけをおさえれば、国語科の時間は知識・理解の学習に偏ってしまいます。人間形成の時間であるならば、国語を通して国語を愛するとか、ゆたかな心情を育てなければいけません。すると、そこで何が必要かといえば、道徳的関心であり、その登場人物の生き方なり、あるいはそこに描かれている価値意識なりに対して関心をもつということだと思います。そういう部分をしっかりとおさえることを通して、ねらいにかかわる追求もより深まります。

また、各教科の学習指導案に、ねらいにかかわって、道徳的価値とのかかわりという部分を設けて、必ず記述するようにしていくということになれば、それだけでもずいぶん違うと思います。

土田 これは、これから関心をもつ意味でも重要なポイントになりますよね。

◆教科の評価の中に道徳的観点を入れる

押谷 それと、もう一つは、評価の問題があります。各教科の評価は、基本的に「関心・意欲・態度」、そして「思考・判断力」「表現・技能」「知識・理解」の4観点ですね。私は「関心・意欲」をもっと広くとらえなければいけないと思うのですが、実際にやられているのを見ると、この学習に興味をもって意欲的に取り組んでいるかどうかですね。そして、この学習に対して「思考・判断力」がついたか、「表現・技能」や「知識・理解」が身についたかどうかというの、全部、個人レベルのことなんです。この4観点を今のよう形で位置づけているとしたならば、その授業は限りなく個別学習になっていくと思います。だから、5本目の柱として、道徳性の育成にかかわるような道徳的観点を評価の中に入れていく必要があるのではないのでしょうか。

土田 私は学生には、教科指導においても、教科のねらいだけ、つまり「何々ができればいい」ということにとどまってはいけない。この子どもがどのような子どもに育ち、どういう大人になってほしいのかという教育的理念をもつことが大事だ



押谷由夫先生

といつも言っています。教科にも当然、教科のねらいがあり、でもそのうえに道徳的、また人格の完成ということをイメージしながら教育活動を進めなければいけないと、私は受け取ったのですが、いかがですか。

押谷 それ結局は、学習意欲ともかかわってきます。ただ知識を身につけたいということではなくて、その上位の自分の可能性を拓いていきたいとか、あるいは人に役立つような知識を身につけていきたいとか、もっと生き方にかかわって学習意欲がもてるようになってくるのではありませんか。

◆道徳の評価はどうあるべきか

土田 5本目の柱として道徳的な観点としての評価が入ってくるとよいのではないかというお話があったわけですが、道徳の評価について、どのようにあるべきかとお考えでしょうか。

押谷 指導を充実させるために評価があるとすれば、先生方が道徳の授業を充実させるときに必要な評価は、子どもたちの道徳性の評価よりも、むしろ指導過程、プロセスですね。その指導過程において、子どもたちの姿や発言、あるいは子どもたちが書いたものなどを通して、自分の意図したような対応が子どもたちにできていたかどうか、これを評価していった、それがうまくいっていなければその改善をしていくというような形で指導に生かされていますね。だから、まずはそういう指導過程の評価というのを考えていく。

もう一つは、道徳の時間のねらいという大きな目標にかかわってどれだけ子どもたちが深めていったかを見ることがあります。道徳の時間というのは道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を身

につけるということですね。道徳的価値の自覚を深めるというのは、道徳的価値とのかかわりで自己をしっかり見つめ、その中で自己評価もしっかりやっていくということです。自己を見つめるというのは、言葉を換えれば、自己評価なんですね。つまり、道徳の時間の目標は何かというと、子どもたち自身が自分をいかに見つめ、自己評価を深めているかということになります。それが自己指導に役立つわけです。指導と評価の一体化ということを、道徳の時間で考えるならば、指導する先生が子どもたちを評価して指導に生かすという部分と、子どもたち自らが自分を評価して、そして自分を高めていく自己指導に生かしていくという部分があります。これが基本ではありませんか。自己評価を深められるようにするには、ポートフォリオ的な評価が必要です。記録をしっかりと残していけるような工夫ですね。前から言っているのですが、ノート指導というのが、たいへん大きな役割を果たすように思います。

土田 自己評価するにはやはり手がかりが必要ということになりますが、道徳だけ板書の字を子どもたちは書かないんですね。私は、やはり練り合いのプロセスこそほんとうに大事な部分が詰まっているのではないかと考えております。それを、何とか思い出させるような記録として、板書の最後のところをデジカメで撮って、それを子どもたちの記録にワークシートといっしょに残すような工夫をしたらどうかということを最近提案しています（本誌P.22～23参照）。

押谷 私もまったく同じことを言っています。そして、1時間の授業に「道徳ノート」を3ページは確保してほしいと提案します。

1ページ目は要するに事前の取り組み。いろいろと調べてくるとか、資料を事前に渡しておき、いちばん心に残ったところを書いてもらうとかですね。あるいは、「思いやり」の授業をするときに、前の「思いやり」の授業を振り返ってみて疑問に思ったことやもう少し話し合ってみたいと思ったことなどを書いてもらう。1時間の授業だけではなくて、事前に価値の耕しや興味・関心の喚起や課題意識の確認などを行うわけです。それが1ページ目です。

そして、2ページ目は授業について書きます。道徳の時間の板書というのは基本的には子どもた

ちの考えを整理したり、焦点化したりする役割を果たすわけですが、本時の授業を思い出すときにも板書がいちばんなんですね。先生方は、授業後、5分ぐらいで、板書のだいたいを書くことができるではありませんか。それを帰りの時間に縮小コピーして、2ページ目の上の3分の1ぐらいに貼れるようにする。そして、その下の3分の1に、今気づいたことやそのとき言えなかったことなどを書いておく。残りの3分の1に「今日の学習で学んだこと」とか「心に残ったこと」、「新しく発見したこと」などを書いていく。そこに、「今日は自分の意見をしっかりとめましたか」とか「相手の意見を聞くことができましたか」など自己評価する欄を設けておいてもいいかもしれません。これが2ページ目です。

3ページ目は、事後の取り組みです。道徳の時間で内面が高まれば、例えば、だれかともっと話してみる、家に帰って両親に話してみるとか、資料に書いてあることを実際に自分も取り組んでみるとか、起こるはずです。それを記録するのです。それが3ページ目です。

こういう形で、3ページを1授業に対して用意し、先生がコメントを書いてあげるということにすればどうでしょう。事前、事後の部分に、各教科等の中で行ったことも書くことがあっていいのです。すると、このノートを見るだけで道徳の時間の特徴も自覚できます。

土田 先生がおっしゃった教師のコメントというのは、書いている内容が道徳的に正しいとか正しくないということではなく、振り返ったことに関してどうだったかということですね。教師の評価というのには、よいとか悪いとかを評価するというイメージがありますけれども、言葉を子どもたちに返す、そこにやり取りがあるということが私は評価だと思っています。

押谷 子どもたちの自己評価が自己指導につながっていかねばいけないということですね。

土田 つまり、ポートフォリオ的な形で活用されとするとすれば、教師の言葉かけによって子どもの意識をより高いところに導くことができる。

押谷 そういうことですね。それが一つのきっかけになって、道徳学習がいろいろなところにはじけていく、ということが求められます。そういうことがしっかりできるようになれば、今回の改正

教育基本法の趣旨がしっかりと生かされる学習指導要領になっていると評価されるのではないのでしょうか。

◆道徳における「言語力の育成」は

土田 また、今回の改正の中に、自分の心を見つめ直し、自分の言葉を言語化するという意味でのキーワード、「言語力」という言葉が道徳にも入りました。これはたぶん、学び合い、練り合いを通して言語化しながら、子どもたちがお互いを高め合うということだと思うのですが、「言語力の育成」に関してはどうでしょうか。

押谷 基本的には、読解力をしっかりと育んでいかなければいけないということですね。言語力というのは、まさに思考力で、言葉にすることで共有化できるわけです。国語教育のみではありません。道徳的な思考、あるいはポートフォリオ的な評価へと生かせるように言語力を高めていくという形での言語力の育成だというふうにおさえていただければと思います。

◆「道徳教育推進教師」の役割は

土田 では、次に、「道徳教育推進教師」が今回位置づけられましたが、これについてはいかがでしょうか。

押谷 広島県の例があります。以前、道徳があまりやられていないという実態がわかり、文科省のいわゆる是正指導が行われました。広島県では、生徒指導の困難な学校に県の指定を受けてもらって取り組んでいたのですが（指定校は毎年30校）、その半分を、道徳の指定校として取り組んでいたできました。同じ生徒指導の予算枠の中でやるわけですから加配があり、それは生徒指導の加配ではなくて、道徳指導の加配という形で位置づけられたわけです。つまり、道徳加配の先生が各クラスの道徳の授業にいろいろとかかわっていくわけですね。T・Tでやる場合もありますし、また研修会でも中心的にやっていきます。道徳加配ですから、道徳の授業に集中してかかわれます。このことにより、各学校で道徳の授業が35時間、確実にできるようになったというのです。そして、2年間の指定ですが、2年が過ぎれば加配の先生がいなくなるというのではなくて、そのあとは周りの4校か5校ぐらいをその先生が指導するという

ことなのです。

現在も、道徳主任というのがおられるわけですが、これと何ら変わらないようでは、わざわざ「道徳教育推進教師」という名称を使う必要はないわけです。

土田 「道徳教育推進教師」というのは、道徳主任を超えるものであり、その違いをどう出すかという点では、今言われたような、道徳の加配ということがありますね。

押谷 例えば、生徒指導主任とか教務主任というのは、手当が出るではありませんか。道徳主任も手当が出るとしたら、これはレベルアップして生徒指導主任とか教務主任と同レベルになったということになりますね。やはり、加配となったら、その先生の責任は道徳主任より重いわけですから、よりいっそう活躍いただける、効果があがるというふうに思いますね。ただ、この部分については文科省は明確にしておきませんので、これからのことを見守りたいと思います。いずれにしろ道徳教育充実の大きな切り札として位置づけられていることは間違いありません。いろいろな形で充実されることを望みます。

◆重点項目をどう指導するか

土田 話題を変えて内容に目を転じてみると、例えば、小学校で各学年共通に取り組んでいく内容や、また低・中・高学年の重点の項目などについては、具体的にどのように授業を進めたらよいのでしょうか。

押谷 例えば低学年には、「あいさつなどの基本的な生活習慣、社会生活上のきまりを身に付け、善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないこと」とありますが、実践目標的になってしまうんですね。では、これを道徳の時間でやるのかというと、その部分は書いてはないのです。私は、道徳教育は「自ら感じ、考え、判断し、道徳的实践ができる人間を育てる」のが目標だと思います。内面を育てることが道徳教育のいちばんの課題であり、要である道徳の時間はそのことを計画的・発展的に行います。しかし、ここで言っているのは、そこの部分だけをおさえればよいのではなく、そこをしっかりとおさえながら、確実に、してはいけないことはしないとか、あるいはあいさつはしっかりとするとか、きまりを守る

とか、いわゆる実践化までしっかりと見届けた指導をしていくことを言っていると読み取れます。

具体的にどのような指導が必要かという、道徳の時間を要としながら、いろいろな教育活動とのかかわりをしっかりとらせて響き合わせる指導をやらなくてはけませんよということです。道徳の時間を要するというのが大前提になるので、道徳の時間をないがしろにする、あるいは、体験的なことでごまかしてしまうというようなことはダメですよということです。こういうことをもう一度、確認していく必要があります。

土田 重点項目のところで、集団とか社会にもう少し進んでかかわろうなど、集団や社会を意識しているように受け取れますね。

押谷 道徳の場合は、かかわりというのをベースにしていますから、当然、それは大前提になります。社会性・集団性ということから考えるならば、やはり特別活動ですよ。では、特別活動がどういうふうに改善されているかという、例えば小学校の場合、低・中・高学年にわたって学級活動の具体的な目標が書かれてあり、その中で生活づくりとか、適応指導というのがあります。つまり、自分たちで自分たちの集団を作りあげていき、いわば集団形成能力をしっかりと育てていく体験の中で、しっかりした価値意識や規範意識などを育てていこうとしています。そういうものと、道徳の時間における価値の自覚をしっかりと深めようとする授業とを、うまく響き合わせていくことが必要です。そういうことを求めているというふうにとらえていいのではないのでしょうか。

◆『心のノート』の活用は

土田 あと2点ですが、一つは、『心のノート』の活用のしかたと今後の『心のノート』のこと。そして、これからの道徳教育の方向性ですね。それにつきまして、ご意見をいただけたらと思います。

押谷 今回の学習指導要領の改訂を通して、『心のノート』の重要性や価値がいっそう確認されたように思います。

『心のノート』は、全教育活動を通しての道徳教育に使える教材です。しかし、なかなかそれが使われないし、教科書的なものもむずかしいということで、『心のノート』の中に道徳の授業で中心資料として使える2～3時間分の資料を掲載すれ

かどうかという意見もあります。そうすることによって、より子どもたちが活用しやすくなるのではないかということです。

そしてもう一つは、いわゆる特別活動にかかわる行動面、例えば先ほど出ました集団形成能力というものにかかわってのノウハウをこの中に入れていこうではないかという意見です。ただそれを、本論のほうに入れてしまうと混乱してしまいますので、本論以外のページを補助的に設けて集団活動をするうえでの心掛け的なものとか、学級活動で使えるような教材もそこに入れてはどうだろうかと思います。単なる教材ではなく、日常的な行動のしかたとか、コミュニケーションのしかたとか、いわゆるハウツー的な部分で活用できるようなものをつけ加えていくという形でたぶん改訂されるだろうと思います。

土田 道德授業の資料とリンクしながら、集団のかかわり方のスキルといいますか、例えばコミュニケーションのとり方とかのノウハウとして活用できるものも入れていく改訂が進んでいくのではないかと思います。

それでは最後に、これからの道德教育の方向性について、先生のお考えをお聞かせいただきたいと思います。

◆これからの道德教育の方向性は

押谷 基本的には、道德教育をベースとした学校改革です。それには今までお話したように、やはりすべての教育活動が道德性の育成、つまり人格の形成という部分にかかわっているということをしっかり認識していただきたいですね。そして、ただ認識するだけではなく、それを具体的にどのように展開していくとそのようになるのかというノウハウが必要です。それが学習指導要領全体にちりばめられているということとしっかりと読み取りながら、それらを結びつけていくことが今後の大きな課題になるでしょうね。そして、その要として道德の時間が位置づくようにするという事です。

また、だれもが取り組める方法として提案しているのは、例えば「思いやりの心を育てよう」という内容項目を重点目標にした場合、道德の時間で年間4回か5回取り上げますね。その資料を事前に印刷して冊子にし、「思いやり」の第1回目



土田雄一先生

の授業にプレゼントするのはいかがでしょう。ただ単に資料を集めるだけではなくて、その資料と資料の間に白のページを5～10ページぐらいはさんでおくわけです。「思いやりの心」について感じたこととか、教科等でいろいろと考えたこととかを含めて、メモをしていくようにする。そして2回目の授業をするときも、また同じ形になるわけです。そうすると、今までこの「思いやりの心を育てよう」ということでどういう勉強をしてきたのか、どういうことを学んできたのかということ振り返ることもできます。ノートはどう使ってもいいのですが、重点的な目標にかかわる指導には、そのような冊子を作り活用する。計画的に事前の学習や事後の学習を行い、取り上げている価値にかかわって、感じたことや学んだこと、体験したことなども書けるようにするという形で、道德学習を計画的に発展させることもできます。土田 最後に、本日の対談で私自身が感じたことを簡単にまとめさせていただきます。

各教科に道德の内容が明記され、これをどう生かすかというのが今後の大きな課題であり、「道德教育推進教師」は「道德主任」を超えた役割を果たすことが今後の活性化につながっていくだろうというお話でした。また、子どもたちの道德教育の推進にあたっては、振り返りができるワークシートやノート、記録などが必要であり、自己評価をしながら、子どもたち一人一人が高め合うような教育活動を工夫する必要があると思います。

先生のお話を聞きながら、自分たちも道德教育の推進者としてがんばっていかなければいけないという思いを新たにさせていただいた対談でした。

どうもありがとうございました。

(※この対談は平成20年2月21日に行われたものです。)

“人間の教育”としての 道徳教育

淑徳大学名誉教授 新宮 弘識



1. 目標に「自己の生き方についての考えを深め」という文言が示されたことについて

○「道徳教育は人間の教育であることを強調した」と理解できないか。

平成元年の学習指導要領道徳の中学校の目標には「人間としての生き方についての自覚を深め」という文言があったが、小学校の学習指導要領道徳の目標には、これに関する文言がなかった。今回の改訂で、小学校と中学校との道徳の整合性を図ったと思われる。

しかし、私は形式的な問題だけではないと理解する。小学校における道徳教育も、究極は人間の教育であることを改めて確認し、それを目標欄に的確に示したものであろう。

道徳教育は、子どもが人間のよさを理解し、素晴らしいなあと感動することが重要であるが、その段階に止まることなく、人間のよさの芽は自分も確かにもっていることを自覚し、それを大切に磨いていこうとする「強さ」が求められる。「自己の生き方についての考えを深め」という文言は、一人ひとりの子どもが人間のよさを自分なりに磨きあげていく真の人間力を育てることが道徳教育であることをあらためて強調したものであろう。

2. 内容の冒頭に「道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の内容は、次のとおりとする」という文言が示されたことについて

○教科（系統）主義に立つ道徳教育論と経験（生活）主義に立つ道徳教育論が調和するところに道徳教育を位置づけようとしたのではないか。

道徳の授業の教科化に関して、相対する二つの道徳教育論争が行われたことは周知の通りである。これは、昭和33年の道徳の授業を特設した当時の教育論争と似ている。

その一つは「人間が本来もっている人間らしさは、生活上よいといわれていることを生活の中で学ぶことによって磨かれる」とする教育論であり、これは経験主義に立つ教育論である。他の一つは、「人間が本来もっている人間らしさは、人間のよさを系統的に教えることによって磨かれる」とする教育論であり、これは教科主義に立つ教育論である。ところで、二つの教育論には一長一短があり、私は両々相まって道徳教育は成ると考えている。

私は、道徳授業の教科化によって、経験主義に立つ道徳教育論が軽視されるのではないかと危惧を抱いていたが、「道徳の時間を要として」「学校の教育活動全体を通じて」という文言を明記することによって、二つの教育論が調和する方向において道徳教育を位置づけたことを評価したい。

また、「学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の内容は、次のとおりとする」と、学校の教育活動全体を通じて行う道徳の内容を明示したことや、教科等の学習指導要領に、この趣旨を受けて「道徳の時間等との関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、（教科等）の特質に応じて適切な指導をすること」という文言が示されたことも、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の更なる充実を図る意味において評価できる。

3. 内容の重点化の観点を示したことについて

①現代の社会的教育的諸問題に対応しようとするものではないか。

道徳教育の重点化を図る重要性に鑑みて、低中高一貫する重点化の観点や、低中高の発達段階や特性を考慮した重点化の観点を示したことは、現代社会が抱える教育的諸問題や発達課題から考えて当然のことであるといえよう。特に、人間の教育を志向する道徳教育が、人間らしい基本的生活習慣の乱れ・自他の生命の軽視・人間の関係性の喪失・規範意識の低下等の現代社会の抱える教育的諸問題に十分に対応しきれていない現状に鑑みて、このような重点化を図るよう配慮すべきとしたことは重要なことである。

また、「情報モラル」の指導に留意するよう特記した点も、現代社会の抱える教育的諸問題に対応する意味において注目される。

②内容を関連的構造的にとらえて指導することの重要性を示唆したものではないか。

平成20年2月18日の報道によれば、千葉大学は平和利用のためのロボット開発でなければ研究を認めないとする方針を確立したという。

これと同様に、道徳の内容として示されている努力・勇気・創意工夫等は、人間のよさの一つには違いないが、それが犯罪に使われることもあり得る。努力・勇気・創意工夫等の人間のよさをどの方向に向かって使うかが重要である。学習指導要領が示す「内容項目間の関連を密にする」という文言はこのことをいっていると理解する。

例えば、重点化という観点から内容を関連的構造的に把握して指導してこそ、それが子どもに実感として受け止められ具体的な生活の中で生きて働く人間力になり得るのである。

③「心を育てる」という道徳教育の「もと」を大切にしながらも、人間らしさをきちんと教えて「身につけさせる」ことを強調したと理解することができないか。

今回示された重点化の観点は、各学年に一

貫するものが2、低学年が4、中学年が2、高学年が5であるが、その中で「身につける」という表現やそれに近い表現をとっているものが6を数える。この趣旨は何か。

以前から、「道徳教育には、育てることと、身につけることがあるのではないか」という教育的課題が浮上していたようである。「身につく」は、それが自分のもののよう自由操られるの意があり、人間のよさが自分のものとなり心と行いとが一如になることであろう。とすれば、道徳教育は人間のよき行為を生む心の教育であるとする「もと」を大切にしながらも、その心を行為に表す力を育てる教育も大切になる。また、実際に行うことによって心が広く深くなるとする教育も大切になる。もちろん、身につける教育は、発達段階に応じて行う必要があるが、私は人間らしい生き方をきちんと教え、それを身につけさせるという趣旨を高く評価したい。

4. 魅力的な教材開発や活用の目安が具体的に示されたことについて

私はこの文言をみて、井沢純の「資料は、額縁の中と同じである。資料は、人間の生き方を人間の目を通して象徴化したものであり、その方が、現実より人間の真実がみえる」や、井上治郎の「資料を語るとは、自分を語ることである」とする資料論を想起する。

資料の充実は重要である。文部科学省が道徳資料を教科なみに補助することや、現場では資料の開発とともに、国語における資料の読みと道徳における資料の読みの違いを明確に把握して資料を活用することを強く希望する。

5. 道徳教育推進教師を中心とした指導体制の充実について

道徳教育の更なる充実を図ろうとする趣旨であろうが、推進教師は如何なるステータスであろうか。それが明確に示されない限り、教科の主任から先に決まり、道徳主任は後回しという現状は変わらないように思う。

人間教育が再認識された改訂



岐阜大学教育学部附属小学校教諭 竹井 秀文

2月に発表された新学習指導要領は、社会の要請に応える改訂が行われたように思う。

現場の教師として、新学習指導要領を読んで、注目したい点が五つある。その五つについて述べたい。

1. 目標に「自己の生き方についての考え」が新規に挿入されたことについて

この表記は、現代の子どもたちが自分の生き方に対して、将来の展望も抱けず、きちんと向き合うことができない状況に陥っている時代背景を反映したものではないか。これは、現代社会における子ども相互の人間関係の希薄さが要因の一つのように思う。

だから、自己の生き方について考えを深めるためには、他者との関係性の中で自己のあり方について考えたり、仲間と磨き合ったりすることが大切になるのではないだろうか。

つまり、自己の生き方について考えるということは、他者の生き方も考えなければならないということである。そういう意味でも、この「自己の生き方についての考え」とは、自己中心的であってはならない。人と人との営みの中で共にプラスになるような自己の生き方について考えるべきであろう。

そのため、学級担任は道德教育を推し進める母体である学級集団をつくりあげる必要がある。学級経営こそ、道德教育を支える礎になることをあらためて述べていると考える。

2. 内容について

次に、第3学年及び第4学年の内容に着目したい。内容1及び2に「よく考えて行動し」や「進んで」という言葉が新しく挿入された。どちらの言葉も、自ら考え判断していこうとする「主体性」を求める言葉である。

発達段階をみても、3・4年生(中学年)は、自分を客観的にみつめ、自分の考えを構築できるように

なる時期である。このような時期に「主体的に生きること」を道德の時間の重点に置くことで、自分を肯定的にとらえ、よりよく生きようとする推進力が育まれるのではないかと考える。自分がやろうとすることに対してよく考え、進んでよりよい生き方を求めることができる3・4年生(中学年)を目指すことは、とても重要であると考えます。

道德の時間では、このような主体性を育むために、道德的価値を子どものものにすることが大切である。道德的価値を子どものものにするためには、子ども自らが「いいなあ」「すてきだ」「このように生きるといいのだ」「すごいな」「ためになったな」と憧れを感じることを道德の授業では特に大切であると考えます。

3. 言葉の入れ替えについて

①「文化」と「伝統」の入れ替え

今回の改訂では言葉の入れ替えが目につく。特に注目したいのは、「文化」と「伝統」の入れ替えである。これは、中・高学年「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」に示してある。

「伝統」とは、「ある民族・社会・集団の中で、思想・風俗・習慣・様式・技術・しきたりなど、規範的なものとして古くから受け継がれてきた事柄。また、それらを受け伝えること。」(『大辞泉』/小学館)

「文化」とは、「人間の生活様式の全体。人類がみずからの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体。それぞれの民族・地域・社会に固有の文化があり、学習によって伝習されるとともに、相互の交流によって発展してきた。」(同上)

音楽科や国語科の改訂を見ても、「伝統」という言葉を前面に押し出していることがわかる。道德の時間で、この「伝統」を育むためには「愛国心」の授業を積極的に行うことやその価値につながる「郷土愛」「愛校心」「家族愛」などの内容に進んで取り組むことが大切となる。

②「自然愛・動植物愛護」と「生命尊重」の入れ替え

入れ替えのみの改訂で、もう一つ注目したいのは、内容「3 主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」における内容項目の入れ替えである。

この入れ替えは、自然愛・動植物愛護と生命尊重の入れ替えである。これは、生命尊重を最も重要な内容として扱ってほしいというメッセージではないだろうか。

生命尊重の授業で重要なことは、人間関係の中にある自分のいのちについて考えることである。キーワードでいえば「つながり」である。

自分だけのいのちではなく、人と人との関係性の中で自分が生かされていることに気づき、そこを出発点として、考えを広げてほしいという願いが込められているのではないだろうか。

4.「指導計画の作成と内容の取扱い」について

この項の（3）では、「……（中略）……低学年ではあいさつなどの基本的な生活習慣，社会生活上ののきまりを身に付け，善悪を判断し，人間としてしてはならないことをしないこと」と示している。

誤解してはいけないこととして、「人間としてしてはならないこと」を教えることが、低学年での最終ゴールではないことである。

あいさつを例にすると、その姿だけを求めるのではなく、その姿を支える心の動きについて考えさせるべきである。

事前にあいさつをしっかりとやらせて、やってみて、道徳の時間に返して、あいさつをすることの値打ちを深く考えさせる授業を仕組みたい。

低学年は、生活体験が少ないだけに、形から教えることは、とても有効である。それは先に述べた中学年の「主体性」につながる基本となるだろう。

あいさつを例に述べてきたが、学校の全教育活動で教えるべきことはきちんと教えていこう、とする道徳教育が重要であるということが再認識された結果であると私は捉えている。

5.「指導計画の作成と内容の取扱い」の3に新設された2項目について

①魅力的な教材の開発

（3）では、「先人の伝記，自然，伝統と文化，スポーツなどを題材とし，児童が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して，児童の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」という内容が新設された。

特に先人の伝記という言葉に注目したい。それは、先人の生き方と自分の生き方を比べさせる道徳の授業が展開できるからである。「自分だったらどうか」や「どうしてそのようにしたのか」と先人の生き方と自分の生き方を比べることで、先人たちのよりよい生き方を資料から直接学ぶことができる。そのような学習活動を通して、今までと違う自分（新しい自分）の生き方を見つけだすことができると考える。

②表現する機会の充実

（4）では、「自分の考えを基に，書いたり話したりするなどの表現する機会を充実し，自分とは異なる考えに接する中で，自分の考えを深め，自らの成長を実感できるよう工夫すること」という内容が新設された。

ここでは、まず「書いたり，話したりするなどの表現する機会の充実」という文言に注目したい。抽象的な自分の考えをより具体的に意識させるためには、「書く」という活動がとても有効である。それは、自分の考えを文・絵・詩などで「書く」活動によって、自分と対話させることができるからである。この対話こそ自分の考えを再構築している姿である。道徳的価値を観点として書くことは、自分の考えをより具体的に、自らの成長を実感することにつながるであろう。

そして、「自分とは異なる考えに接する」ために、仲間の意見と自分の意見を「比べる」活動が重要である。資料に対する仲間の考えと自分の考えを比べることで、自分の考えが多面的に広がり、その広がり、おのずと内面的に深まっていく。内面的に深まったことがわかる授業を仕組みれば、自らの成長を実感できるであろう。

以上のように大きく五つの点に注目した。

新学習指導要領では「生命尊重」「伝統・文化（愛国心）」「主体性（よく考えて・進んで）」「規律」「比べて考えさせる」「自分の考えを表現させる」など改訂のポイントがあげられる。どのポイントも、子どもたち自らが考える道徳の時間にしようとする願いのもとに改訂されたと考えて問題はないと捉えている。

しかも、人と人との関係のもとに成り立つ「自己の生き方について考えること」を目標の中に入れ、主張しているのである。

道徳教育は人間教育であることが再認識される改訂である。

人の生き方に学ぶ道徳授業の実践

—生き方に影響を及ぼす学びの環境構成—

千葉県富津市立大貫小学校教諭 三浦 貴子



はじめに

教室の子どもたちは、人とのつながり・コミュニケーションが希薄になり、お互いに影響を及ぼすことが少なくなっている。また、本来、子どもたちは大人をモデルにして、将来の希望をもつものだが、近年、特に人の生き方に学ぶという基本が揺らいでしまっていると感じる。やはり、人との出会いが最高の学びになることを実感させ、自分の生き方を考えさせることが必要である。

そこで、小学校6年生を対象とし、自分はどのように生きていけばいいのか、どう生きたいのかについて考えさせる生き方についての道徳授業を展開することにした。そのためには、生き方に影響を及ぼす学びの環境構成が必要になる。そこで、3つのステップを考えた。

①モデルの発見

(自分の生き方に参考になる人を見つける)

②モデルへのアプローチ

(人生モデル調査・「人生モデル」活用 の道徳授業)

③モデルの共有

(道徳通信・ワークシート・親子学習会)

1 授業の計画

(1) モデルの発見

まず、道徳オリエンテーション(語り合う仲間づくり)を行った。次に命とは何かを話し合うと、自分のもち時間だから生き方が大事だと思う。さらに、なりたい自分をしっかりと、「人生モデル」を見つけない、調べたいという子どもたちの願いが語られた。

(2) モデルへのアプローチ

子どもたちは、それぞれがなりたい自分になるために「人生モデル」を探し、調査を始めた。その中から6人のモデルを選び道徳授

業を展開してきた。ここではその中から、地域にお住まいの山田さんの授業を取り上げ、詳しく紹介する。



写真：山田さんの紹介

a なりたい自分

“人のために尽くせる人”になりたいという子が3人いた。いつも、周りの人から助けられているが、これからは、人の力になりたいという願いがあった。

b 山田さんとの出会い

地域清掃ボランティアや子ども会のジュニアリーダーの行事で山田さんと出会った。山田さんは、12年前から地域の子どものリーダーとして活躍され、35年間消防署に勤務されている方である。人のために何かをすることが生き甲斐だとおっしゃっている。3人は山田さんの姿や思いに強く影響を受けた。

c 授業前のアプローチ



写真：山田さんの自宅にて

山田さんの自宅に訪問し、山田さんのボランティアに対する思いや今までの人生経験について話を聞いた。生き方のヒントが見えてきた。

● 授業の進行

- (1) 主題名 「人生は出会い」 内容項目 4—(4)勤労・社会奉仕
- (2) 資料名 自分にできることから ～山田誠さんのお話～
- (3) 本時の目標

山田さんのお話を聞いたり見たりすることを通して、働くことの意味を理解し、人のために尽くす思いに共感し、自分も人のためにできることを見つけて、実行していこうという気持ちをもつ。

- (4) 展 開

主 な 発 問 と 児 童 の 反 応	指 導 上 で 配 慮 し た こ と
1. ボランティア体験を振り返る。 ○ボランティアを行った時の気持ちはどんな気持ちでしたか。 ・ 疲れた ・ 大変 ・ できればやりたくない ・ おもしろかった ・ 人のためにがんばるって気持ちがいい 2. 地域でボランティアや消防士の仕事をする山田さんの紹介をする。 ○山田さんを人生モデルとし、直接会いに行き取材したグループが、今日は山田さんをみんなに紹介してくれます。お願いします。 ○山田さんを知ってもらうために、ぼくたちが紹介します。 ・ ボランティアについて ・ 消防について ・ 経験談 ・ 思い 3. 山田さんに聞きたいことを質問する。 ○山田さんにもっと聞いてみたいことはありますか。 ・ 仕事もボランティアも人のためにがんばっていますが、やめたいとか行きたくないという経験はありましたか。 ・ なぜ、ここまで続けてこられたのですか。何がそうさせたのですか。 やめたいと思ったことはない。でも、今日は行きたくないとかじけたときはあるなあ。でも、待っている人がいるからがんばれた。 人のために最後は自分のためになるし、成長につながるからやっていける。 ありがとうって言われるとまたやろうって思うよ。 4. 山田さんの生き方を考える。 ○山田さんに教えてもらったことは何ですか。 ○自分の生活に生かしたいことは何ですか。 ☆ワークシートに書く。 ☆発表をする。 ・ 自分の力になることがわかった。 ・ ぼくも人のために何かしたいと思った。 ・ 人に尽くす幸せや生き方の豊かさを感じた。 5. 山田さんからのメッセージを聞く。 思ったことを実行してみる。結果は後からついてきます。みんなが世の中を変える。自分と周りの人に気が配れるといいですね。 ○みなさんの考えを聞いて山田さんの感じたことやみなさんのこれからの人生にアドバイスをもらいましょう。 ○今日、山田さんから教わったことを今後の生き方にぜひ参考にしていきましょう。山田さんを「人生モデル」として紹介してくれた3人の友だち。素敵なお会いをありがとうございました。	・ 今までやってきたボランティア体験を振り返りながら、その時の気持ちを思い出させる。 ・ 人のために尽くすことへの本音を聞き出す。 ・ 人のために尽くす山田さんを人生モデルとして調査したグループが前に出てきて紹介する。 ・ 短冊カードにポイントとなることを書き、ローブに掲示していく。 ・ 山田さんがどんなことをやってきたのか、やっているのかを聞き、山田さんの生き方を知らせる。 ・ やって来たことだけではなく、その時の思いやなんでそうしたのか、どうして選んだのかなど山田さんの生き方のポイントとなる部分を探っていくようにする。 ・ 山田さんの話の後、児童の経験談やその時の気持ちなどを聞き、話題を自分とつなげていくようにする。 ・ 教えてもらったことをどう自分に生かすかじっくり考えさせる。 ・ 具体的な活動が出てきたら全体へ広め、実践できるよう励ます。 ・ 「人のために尽くす」ことが自分の成長につながることを、豊かな生き方ができることを押さえる。 ・ 児童の発表を聞いて、山田さんが感じたことを話してもらう。 ・ アドバイスを応援メッセージとしてとらえ、実生活で活動する意欲につなげる。 ・ 最後に、5年前に教師も山田さんと出会い、それ以来ずっと大きな影響を受けてきたことを話してまとめとする。

(3) 授業後の様子とモデルの共有

山田さんと出会い、児童は学校奉仕作業を進んでこなしたり、率先して挨拶運動をしたりと主体的に活動するようになった。

授業後は毎回、子どもたちが家族に今日出会った「人生モデル」の紹介をし、自分の考えたことや学んだことを書いたワークシートを見せ、保護者にメッセージをもらうという活動を行ってきた。これを私は“鉛筆トーク”と呼んでいる。山田さんの授業後のワークシートを紹介する。

〈保護者のメッセージ〉

他人のために何かをする。「ありがとう」と言われると自分の心も喜んでいると思いませんか。その気持ちを忘れない人に成長して欲しいと思います。

山田さんに会ってからのこと。先日店の下の道にたくさんのゴミが捨てられていました。あなたは、友だちとそのゴミを拾って帰ってきました。とてもえらかったと思います。逆に「今の大人の人は……」と思いました。これからも人のためにがんばって。

「ありがとう」の感謝の言葉がいやな人はいないと思います。その言葉を素直に言える人は素晴らしいけれど、言わせる人の行動はもっと素晴らしいのではないのでしょうか。誰かがやってくれると思えばすんなり過ぎてしまい見過ごすこともできますが、人がやらない地道な仕事や行動、それこそ本当に人のためになることだと思います。今日は、良い勉強になったね。

みんなが自分も大切にする、人も大切にするそんな社会ができれば素晴らしいね。人のために何かができる人は、それだけ優しい体験が人より多くでき、自分の心の成長にもつながるよ。まずは、身近にいる友だちや家族の力になってごらん。

モデルの共有として、この他にも、道德通信の発行・家族の手紙・親子学習会も行ってきた。それは、「人生モデル」を通して親子で共通に語り合える良い機会となった。また、親の生き方にふれたり、今まで知らなかった親の思いに気づき、共に生き方を考え、深め

合うことができた。6年生という節目に真剣に生き方について親と語り合う貴重な時間となったと考える。

2 実践を振り返って

子どもたちは、山田さんに会いとても強い影響を受けた。授業前日にこんなエピソードがあった。

例年、6年生があいさつ運動や落ち葉掃きを運営委員や美化委員と協力して行ってきた。6年生の後半にもなると自主的に落ち葉を集め、掃く姿が見られるものだ。でも、なかなか6年生の中で声を掛け合い、学校のため、下級生のために自ら動く子が少なかった。4人の子が立ち上がり、自主的に落ち葉を掃く日が数日過ぎたとき、教師は、クラスみんなに投げかけた。「6年生として落ち葉を掃くのか掃かないのか。掃いている子を見て何も思わないのか」。

子どもたちの多くは、「面倒だ。なんで6年生が……」。4人の子は、「だって6年生だよ。みんなのためにやることは自分も気持ちがいい。なんで、みんなわかってくれないのだろう」。それぞれの気持ちの葛藤が残ったままこの日の道德の授業を迎えた。

子どもたちは、山田さんに今の思いをぶつけた。山田さんの話は、とてもタイムリーで子どもたちの心が大きく動いた。実生活の出来事がこの出会いによって救われた。

山田さんの他にも、棒高跳びのイシンバエワ選手、全日本バレーボールチームの竹下佳江選手、義手の詩画家大野勝彦さん、家族などの生き方を調べ語り合ってきた。これは、「人生モデル」を自分の生き方に反映させるために有効な学習経験であったと考えられる。それによって、自分の生き方を深く考える基盤がより強固になったと思う。

このような授業の経験をきっかけに、子どもたちがこれからも人生の節目節目で生き方に影響を受ける「人生モデル」をもつこと、ひとりで悩まず親子や友だちと生き方についてとことん語り合うことを日常化してくれることを私は願っている。

生き方に学ぶということ

千葉大学大学院教授 上杉 賢士



人と人の関係が変わった。

かつて、「反面教師」などと呼んで、意識的に遠ざけるようなことがなかったわけではない。しかし、それは一部特定の対象であったり、特定するがゆえに逆に強い意識を向けていたりもした。

それが、いつも近くにいるのに、その間には何のつながりもないというようなケースが増えた。お互いに自分のことを気にかけてほしいと強く思いながら、自分からは何も発しないというような傾向も強くなった。いっしょにいることで、お互いが心理的な負担を感じるようなこともまれではなくなった。

しかし、本来、人と人がいっしょにいるということは、そこに安心感が生まれたり、もっと近づきたいというような感情が生まれたりするものだ。さらに積極的に言えば、自然にコミュニケーションが生まれ、時にはそれが何か新しいものを生み出すための強い動機になることだってある。

PISA 調査で“学力世界一”の座を不動のものにしつつあるフィンランドは、社会構成主義を教育の基盤としている。この難解な教育哲学は、「人と人のコミュニケーションを通じて創造的に産み出すこと」が学びの本質であると説く。

三浦さんの実践は、この彼我のぬきさしならないギャップに注目して、生産的な関係の復活を目指そうとするものである。

平成19年4月からまるまる1年間、研修の機会を得て私の研究室に来了。折から、全国大会の開催やNPO法人の立ち上げなど、私は多忙を極めていた。それでも、その仕事を手伝ってもらいながら、機会を見つけてよく飲み、語り合った。9月には、例年行ってい

るミネソタ州への訪問にも同行した。そこでもまた、よく飲み、語り合った。

近年、注目されている教育論に、「正統的周辺参加」論がある。

「周辺参加」というのは、だれかがしている仕事や作業に途中から「割り込み」、もしくは「便乗」することを指す。しかし、それは学びの方法として認められているという意味で「正統的」と呼ぶ。かつての徒弟制度を念頭においたこの理論は、師匠が懸命に自分の仕事に没頭しているのを横からながめ、手伝いながら自分の技量を高めていくというような学びの仕方をイメージしている。

三浦さんのこの1年は、私の全国大会開催やNPO立ち上げという仕事に「周辺参加」しながら、しかし研修生として「正統的」な意味づけをして学び続けた、とまとめることができる。それは、「生き方に学ぶ」ということを自身が直接的に体験したと言い換えてもよい。

紙幅の都合で、その間に実践したことの2割程度しか紹介できていない。でも、その部分でも、「人と人を積極的に結び、そこに学びを成立させたい」という三浦さんの願いは十分読み取っていただけるのではないかと。

この1年をふり返ってみれば、三浦さんがしてきたことは、結局、「人と人を結ぶのが教師の仕事のきわめて重要で本質的なこと」という仮説を、身をもって検証したということに尽きるのではないかと。

この1年の研修を経て、大きなテーマの入口に立つことはできた。これから先も自身が「周辺参加」を続けながら、いつしか子どもたちにも意味のある「周辺参加」の機会を提供できるような先生になってほしいと願う。



実践
子どもの目が変わる

授業を変える スパイス

福岡県北九州市立沼小学校校長 立川 修司



1 日々の授業は難しいけれど

小学校の先生は、毎日各教科・領域にわたって5時間前後の授業を行いながら日々の学習を進めていきます。しかし、毎時間思ったようには授業はなかなか進まないものです。そんな毎日ではありますが、1年間に数回ほどですが、「うまくいった。」と思える授業を経験することがあります。日々授業されている先生方には、経験的に同感していただけるのではないのでしょうか。

うまくいったと思える授業にはうまくいくだけの理由があるはずです。ところが後で振り返っても、何がよかったのか、なかなかわからないのも現実のようです。ましてや、週1時間しかない道徳の時間がうまくいくことは滅多にないことでしょう。でも、道徳の時間にも、うまくいったと思える授業ができるときがあるのも事実です。うまく説明できずにもどかしいところはありますが、日々授業をされている先生方には、きっとわかっていたことと思います。

⇒だれにもうまくいったと思える授業があるものです。

2 授業の空気を変えるスパイスとは

また、よく授業は生き物だといわれることがあります。同じ学習指導案で授業をしても、クラスや先生が変われば、同じ授業はありえません。ところが、今回の新連載は、変幻自在、千変万化である道徳の授業に、うまくいったと思える授業ができるように、だれでも使えるスパイスを集めようという、無謀とも思える企画であります。

賢明な読者のみなさんはすでにおわりの

ように、アイデア、ヒント、スパイス、決めの一手などといわれるものは、所詮、方法や技術といわれるものであり、いつでも、どのクラスでもうまくいくものではありません。しかし、方法や技術をたくさんもち、状況に応じて適切に使えたときは、授業がうまくいくときでもあります。方法や技術に頼りきってしまうのは本末転倒ですが、方法や技術を軽視しては、教師としての力量も授業の質の向上も図れません。

ここまで読み進められた読者のみなさんは、それでも、教室の空気を変える授業のスパイスが本当にあるのか半信半疑のことでしょう。確かに、薬に例えると特効薬と呼ばれるような劇的効果をもたらす「授業のスパイス」はありえません。だからこそ、全国津々浦々の先生方は知恵を絞り、方法を考えながら、日々授業をされているのです。今回、これから紹介していくヒントもありふれた方法ばかりかもしれません。その点をご容赦ください。⇒たかがスパイス、されどスパイスです。

3 ◆◆スパイス その1◆◆ (友達の多様な価値観を知る)

道徳の授業は基本的に副読本などの読み物資料をもとに、教師の発問と児童の発表という形で進められることがほとんどです。ところが、授業の山場と思われるところで、児童の発表が途切れてしまい、ねらいに迫るのが難しい状況になることがあります（これが公開授業ならば冷や汗ものですね……）。

発問の善し悪しはおいておくとして、実際の授業では、教師が発問し児童は挙手します。教師から指名された児童は自分の考えを教師

へ向けて発表します。他の児童は、指名された児童が教師に向けて発表したことを聞いて授業に参加する……。この繰り返しによって授業は進みます。ここで私が注目したいのは、発問者は教師ですから、発表する児童は教師へ向けて自分の意見を言うというところです。一人ひとりの発表は、クラスの人々に向けても発表しているのだという暗黙の前提があります。しかし、算数の解答をみんなに発表するというのと、道徳の時間に自分の価値観にもとづいて教師に発表するというのでは、児童の構えも自ずと違ってきます。

そんなとき、私は次のようなスパイスを使います。

スパイス——ぐるぐる回し
使い時——話し合いの場面

これは、Aくんが発表したら、「今のAくんの発表をどう考えますか？」とBくんを指名するのです。そして、次にはBくんの発表に対してCくんに尋ねていくことを繰り返すのです。この場合、児童は、教師に向けてというよりも友達の考えに向けての自分の意見ということで発表しやすいと感じます。また、友達の考えと自分の考えの同じところや違うところを比較しやすくなります。

私は一人密かにこれを「ぐるぐる回し」と名付けて実践していました。もちろん道徳の時間以外にも使えますが、多くの児童の考えを聞き出し、多様な価値観の中で考えを深めたい授業では有効な方法だったと思っています。多少、教師による交通整理は必要ですが、どなたでも簡単に今日からでも使える方法でもあります。

⇒ぐるぐる回していきながら、多様な価値観でもって深めましょう。

4 ◆◆スパイス その2◆◆ (うちわ表情絵を持たせる)

道徳の授業では、資料中の場面がわかりやすいように「場面絵」を黒板に貼ったり、登

場人物の関係がわかりやすいように「登場人物絵」を貼ったりすることが多く見られます。

また、登場人物の心情をわかりやすくするため「表情絵」とよばれる絵を使うこともよくあります。

特に、低学年では、動作化や劇化の活動で頭に「お面」を付けて話す活動もしばしば見られます。しかし、自分の頭の上のお面は付けている本人には見えません。さらに、授業中にお面を付けたりはずしたりする活動は、低学年の児童では、難しかったりはいやだりして、授業の流れを止めてしまうこともあります。

スパイス——うちわ表情絵
資料名——「あいさつで しあわせに」
(『ゆたかな こころ』1年 光文書院)
内容項目——1年生の礼儀
使い時——動作化の場面

この授業では、実際に児童に主人公の「ボンタ」役をやらせてあいさつをさせながら、礼儀の大切さを実感させる動作化を取り入れることがよくあります。

そこでこのスパイスでは、うちわを使います。うちわの表に登場人物の表情絵を貼り児童に持ってあいさつをさせます。製作も手軽で、持っている児童も自分が「ボンタ」で、向かい合っている友達が「にわとり」だということがわかりやすい方法です。

さらに、うちわの表に楽しそうな顔を描き、裏には悲しそうな顔を描いて、心情の理解や変化をわかりやすくつかませるという応用も簡単にできます。

また、動作化の前後に、磁石付きクリップで挟んで黒板に貼り付ければ、そのまま板書用の表情絵としても使えて便利です。

さて、第1回に紹介したスパイスは、いかがでしたでしょうか。

⇒次回も看板倒れの可能性を秘めつつ、読者のみなさま、乞うご期待！

道徳の時間を変える①

～自己評価力を高めるために～

千葉大学准教授 土田 雄一



1 新学習指導要領の改訂で何が変わるか

平成20年3月に新しい学習指導要領が提示された。

道徳の改訂のポイントとして、目標に「**自己の生き方についての考えを深め**」という文言が新しく示されたことや内容の冒頭に「**道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の内容は、次のとおりとする**」という文言が新しく示されたことなどがある。内容では低学年に「**勤労**」が入ったところが大きな変化である。その他「**道徳教育推進教師**」を中心とした指導体制の充実が明記されたことも特筆すべき点である。

2 「道徳の時間」に求められるもの

誤解を恐れずに、極論すれば、「道徳の時間」の指導は大きな変化はないのではないか。指導内容の重点や新設の低学年の「勤労」の指導について、「道徳教育推進教師」を中心に計画がたてられるのだろうが、従来の「指導の重点」を変える程度と現場は受け止めている。

「道徳の教科化」が議論されるほど、道徳教育が必要な時代であるのにこのままでは「道徳の時間」にさほど変化がないのではないかと危惧している。では、「道徳の時間」をより充実させるための具体策はどうしたらよいのだろうか。

今年度は、「道徳の時間を変える」ための提案をしていきたい。

3 「自己評価力」を高める

今回は「評価」についての提案をしたい。

道徳における「評価」には、「数値化」に対する抵抗感や「心を扱う道徳をどう評価するのか」という懐疑的な見方も多い。

しかし、数値だけが評価ではない。そして、他者からの評価より、「自己評価」が重要だ。総合的な学習の時間や体育など、学習への目標を立てて、それに対する自己評価を重視している教科もある。

道徳は「自己の生き方について考える時間」ではないか。資料やクラスの友達との話し合いを通して、自分のあり方を考える時間ではないか。だとしたら、他者の評価よりも自己評価が重視されるべきではないだろうか。

「自己評価力」を磨くことはすなわち自分と向き合う力を育てることである。

4 自分と向き合う手がかりをどう残すか ～板書をデジカメで記録する～

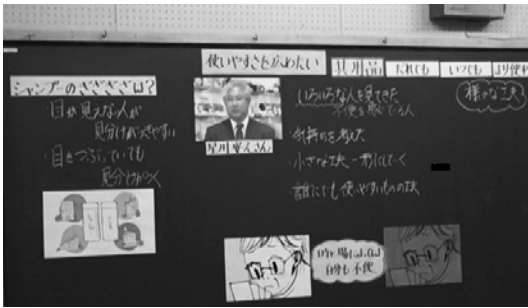
考えてみると道徳の時間に「**板書を写さないのはなぜだろう**」。国語や算数などその他の教科は、自分の考えもノートに書き写すが、板書された大切なことをノートに書き写す。

「道徳は自分の心と向き合うのだから、授業を通して考えたことや感じたことをワークシートに残しておけばよい」という考えもあるだろう。しかし、それは授業の「結果だけ」なのではないか。実は、結果にたどりつくまでの「プロセス」が一番大切なのである。

話し合いを通して、さまざまな考えが深められ、気づきが生まれて、最終的に自分が得たことをワークシートに書く。みんなの思いが詰まった話し合いの「プロセス」を残したい。この「プロセス」は「板書」でわかる。

この板書（プロセス）を子どもたちにも残したい。かといって、「書きなさい」というのもむずかしい。時間がかかる。もっと話し合ったり考えさせたりしたい。

<図1>



そこで、「デジカメで板書を撮影する」ことをお勧めしたい。

すでに実践している方の多くは、授業の記録として、教師の授業研究のため、振り返りのため、研究紀要の原稿のためなどに使われているだろう。

なぜ「教師のため」だけなのだろう。もったいない。私は「子どものため」にデジカメを活用しようと提案したい。

「デジカメで撮った板書の写真を子どもたちに印刷して配布する」のである。それを自分のワークシートといっしょにファイルすることをお勧めしたい。

「それはいい案だけど、カラーだとお金がかかる……。」

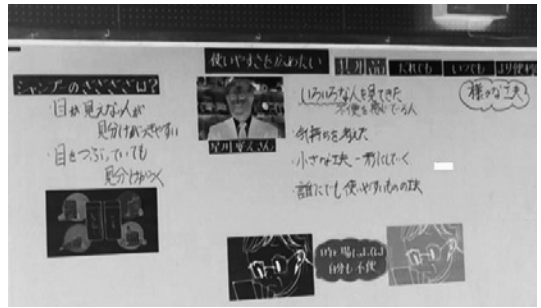
5 デジカメで撮った写真を「白黒反転」にする

そこで、画像を白黒反転させる方法を提案する（WindowsXPの場合）。

- ① 使いたい写真をパソコンで指定する。
- ② 画面写真上にカーソルを置いて、右クリックをする。
- ③ 「プログラムから開く」の中の「Paint」を選択し、クリックする。
- ④ 上のツールバーの「変形」をクリックする。
- ⑤ 「色の反転」を選択し、クリックする。
- ⑥ 「印刷（プリント）」する。

図1の写真を「白黒反転」すると、図2のように「黒板が白になり、白チョークの文字が黒」になる。通常の印刷機で白黒印刷をしても、ベタつかない。たしかに、ちょっと手間がかかる作業だが、大量印刷が可能になり、

<図2>



子どもたちに配布することができる。余白があれば、そのときの授業の様子を思い出しやすいように担任がコメントを記入してもよいだろう。

そして、子どもたちには「自分のワークシート」と「板書の記録」をファイルさせる。学期末に、「どんな道徳学習をしてきたか」振り返る時間を設け、自己評価する時間を作りたい。その時、ワークシートと板書の記録が、自己と向き合う手がかりとなる。自己評価しやすくなる。デジカメとパソコンという文明の利器を活用して自己評価を助けるのである。ファイルには、道徳の時間の記録だけでなく、さまざまな体験活動もいっしょに残しておくにとさらによい。

行動の振り返りと合わせて自己評価する力を育てたい。

6 自己評価力が高まると

自己評価力が高まると「自分に厳しい評価」をする子どもがでてくる。よく頑張っている児童が「頑張りが足りない」と自己評価するケースである。

逆に、始めは自己評価のあまい子どももいるだろう。

しかし、自己を見つめ直す作業を、担任とクラスの友達とともに繰り返すことで、しだいに自分を見つめ直し、評価する力が育っていくのではないだろうか。

自己評価は自分に足りない面に気付くだけではない。自分のよさや成長を実感しながら「自分のあり方を考える」ことである。

道徳授業の改善の第一歩として、「道徳授業を記録に残し、自己評価力を高める手がかりとすること」を提案したい。

道徳教育とは生き方の教育



金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校学内教頭 北川 忠

道徳教育に注目が集まっている。しかし、実際に教室で行われている道徳の実態についてはあまり語られることはない。道徳の時間を年間総時数35時間は行っているけれども、その内容について問われることもあまりない。「しっかりと道徳教育を行うべき」という世論は少なくないが、「しっかりとした」とはどのようなことを指しているのだろうか。教師の誘導に沿って、子どもが洗脳されることを指しているとしたら、これほど恐ろしいことはない。これが国家規模で実施されるならば、いつか来た道へ突き進んでいくことになるであろう。同様の危惧から教科化に反対した市民たちも多いようだ。もっともそれだけ影響力のある教師が道を踏み外すとは思えないが……。しかし、本来の教科化が提案され続けている意図は、「しっかりとした」道徳教育の中身の問題である。お説教や反省会の時間をためらいもなく、道徳としてカウントしている教師はいないであろうが、週に1時間しかない道徳の時間に情熱を燃やし、毎回ねらいを明確にして授業に臨んでいる教師は学校に何名いるだろうか。

子どもたちは教師の反応に敏感である。子どもたちは教師の顔色をよく見ている。副読本を授業前からすでに読み終え、教師が何を問うてくるのか、何と答えてほしいのかを事前に予想していることもあり得ないことではない。こうなると、道徳の時間ではなく、あたりはずれのあるクイズである。結果として、子どもたちが道徳をなめてかかっても無理はない。しかし、これは副読本のせいでも道徳のせいでもない。教師の不勉強のせいである。したがって、しっかりと道徳教育を行うには、教師が力をつける以外にはないのである。

資料を決め、ねらいとする内容項目が決まったら、学習指導要領を「しっかりと」と読み、辞書を使ってでも価値の本当の意味を理解してから、交通手段、すなわちどのように子どもたちをねらいに導いていくのかを決定すべきである。安直に指導書に頼ってはいけない。自分が考えた教師自身が考える「とらえ」がなければ、どうして子どもたちと戦うことができようか。子どもたちはそれほど単純ではない。子どもは本当に心から納得しないかぎり変わらないし、変わらないのであれば必ず道徳的実践力など建前に過ぎない。こんなに難しいのが道徳である。しかし、こんなにおもしろいのも道徳であると思う。教師は自分の生き方で子どもの前に立つ。その教師の生き方に立ち向かい、人生経験の少ないなりに悩んで、考えるのが子どもたちである。だから正解があるはずがない。ただ、自分にとってより良いと思われる方を選ぶことはできる。道徳教育とは、生き方の教育である。失敗から学ぶのが人間。常に成功を続けることはあり得ない。むしろ失敗こそが自分の生き方を振り返るチャンスである。たとえ道徳の授業で失敗したとしても、学ぶ意欲さえ失わなければ必ずいつかは成功する。失敗の授業につきあわされた子どもたちはかわいそうだけれども、その失敗から学ぼうとする教師の情熱さえあれば、子どもたちは自分で軌道修正するものである。道徳の授業で子どもたちと共に創り上げられる世界は、ルートと乗り物を間違わなければ、建前などになるはずがない。きっと毎週の道徳の時間が楽しみになるはずである。もっともっと道徳の学習に向かい合う教師が増えることを願っている。

家庭と連携して行う道徳教育

神奈川県相模原市立ふじの幼稚園園長 江藤 幸恵



道徳関係の資料を見ると、必ず「道徳教育は、家庭と連携して行うことが大切である」と書かれている。道徳教育において「家庭と連携する」とは、いったいどのようなことをいうのだろうか。

前任校は、2年間にわたって文部科学省指定の道徳教育の推進事業として地域や家庭と一緒に道徳の授業づくりに取り組んできたので、授業への協力をお願いすることも比較的容易であった。一昨年、新しく赴任した学校では、道徳教育については学級ごとに任されている状態であった。私は、1年生は非常に大切な学年であると考え。子どもはもちろんであるが、保護者をいかに子どもたちの方へ向かせるか。道徳教育は、学校だけでできることには限りがある。家庭をいかに巻き込み、協力あるいは子どもに目を向けてもらうかが重要なカギになってくる。今まで何もなかった学校で家庭と連携することはできるのだろうか。

家庭を巻き込んだ道徳の授業とは

入学式の後の話の中でも、子どもたちに目を向け、クラスの子どもたちをみんなで一緒に育てていく姿勢をもってほしいと伝える。始まってしばらくは、子どもたちがどう過ごしているか、保護者はとても不安なものである。そこで、学級通信で授業の様子や子どもたちの言葉などをできるだけ細かく伝えていく。授業参観や保護者会、家庭訪問等、とにかく保護者と直接話をする場面、また連絡帳等で間接的にやりとりをする場面を大切にし、自分の考え方なども丁寧に伝えていく。

母親だけでなく、父親も参加する5月末の土曜参観日。保護者にメッセージを伝える貴重な機会である。家族愛をねらいとする道徳の授業を行う計画を立てた。主題名は「かぞくっていいなあ」。おかあさんの誕生日のプレゼントを用意しようとしたが、失敗してしまう。しょんぼりして帰ると、「あなたが元気なのが一番よ」と言われて、うれしくてお母さんの胸に飛び込むという「おかあさんありがとう」という資料を使った。終末で、事

前に家族から書いてもらった手紙を一人ひとりに渡して読ませ、その後、参観している家族に今の気持ちを伝えに行くという展開にした。手紙を読んだ子どもたちは、本当にうれしそうに、参観している保護者の胸に飛び込んでいった。「おかあさんにごほうびしたくなる。ありがとうって言いたくなった」と、そのときの気持ちを道徳カードに書いた。保護者も普段はマイナスのメッセージを送っていることが多いものである。しかし、この手紙を書くことで、子どものよいところに目を向けたり、子どもとの関係を見直したりするようになった。授業後、保護者から「普段流されて生活しているので、いろいろ考える時間をもつことができてよかった。親と子の気持ちがあふれる授業に参加でき、私も心が温かくなった」といった手紙をたくさんいただいた。子どもたちへの手紙は『心のノート』に貼り、保護者からの授業の感想は学級通信に載せた。そういうことを繰り返していくと、家庭からの楽しいエピソードを伝えてくれることが増えてくる。マイナス面の苦情ではなく、子どもたちの成長につながるプラスの情報が増え、子どもたちを見る保護者の目が変わってくる。クラスの雰囲気も温かくなっていく。

手紙は深めるための一つの方法

最近、保護者からの手紙を使う授業を見る機会があった。子どもたちはもらった手紙をうれしそうに読んでいるが、手紙の重さを感じない。複雑な家庭も増えてきた中で手紙を書いてもらうという手間をかけたからには、それだけ意味のあるものにしていきたい。

手紙を使うことがねらいになっていることはないだろうか。そうになると、書く方も「また手紙？」となり、気持ちのこもらない形式的なものになってしまう。普段から学校でやっていることを家庭に伝えることによって、一緒に参加してもらうことが、本当の意味での「家庭と連携する」ことなのである。



言葉の本当の意味

東京都立梅ヶ丘病院院長 市川 宏伸



子どもさんと話をしていると、会話は成立しているのだが、どこか話がずれていると感じることが多い。先日も、電車に乗ろうとしたときのこと、夜遅く乗客は車両当たり数名であった。電車が止まり、ドアが開き、乗り込もうとした。ちょうど中学生かと思われる学生が一人降りてくるところであった。私が乗り込むのと、彼が降りるのはほとんど同時であったが、いきなり体当たりしてきて「降りるのが先だ!」と怒鳴っていた。もちろん他に乗降客もなく、ドアも広く開いており、肩が触れたわけでもなかった。

よく考えてみると、この学生は「乗降に際しては、降りる人が先である」と習っていたのだと思う。しかし、この言葉には「混んでいるときは、……」という前提があるのではないだろうか。この前提がなくなってしまう、「……降りる人が先」という言葉だけが残ってしまったのであろう。

日本語には、前提や省略などが日常的にあり、これを補って考えないと真意が伝わらないときがある。「もう結構です」、「結構な作品ですね」と言う際には、前後の脈絡や、そのときの状況で、“結構”の意味は大きく異なっている。この前提や省略、そのときの前後の脈絡や状況を読むのが苦手な子どもが増えている。

「どうして、挨拶をしないといけないのか?」と大真面目で聞いてくる子どももいる。「挨拶しないと変に思われるでしょ」、「みんなが挨拶しているでしょ」と説明するよりは、「挨拶しないと、友達が減るからさ」と答えたほうが納得してくれる。「どうして人を殺

してはいけないのか?」と聞かれたときも、「君が殺されたら嫌でしょ」、「人間は一度死んだら生き返らないから」などと言うよりは、「人を殺せば、君は刑務所に入るんだよ」と説明したほうが、はるかに納得してくれる。これらの子どもの共通点は、「主観的に、本人を主語に説明すると理解できるが、相手の立場に立った客観的な表現の理解は苦手である」ということである。

この何年か、このような子どもの増加が目立っており、教育だけでなく、医療や福祉の現場でも対応に苦労している。社会で共同生活をしていくには、自分の主張をどれだけ認めて貰えるかは大きな問題である。しかし、社会生活の中で、一人ずつが自己主張を続けていけばまとまらない。自分の主張を通すためには、相手の主張を十分に理解して、譲り合わなければいけないのは自明の理である。そのためには、多くの話し合いを行い、どこを主張し、どこを譲るかを決めなければいけない。一方的な自己主張は得意であるが、「相手の主張を理解して折り合いをつける」のは苦手である。

最近話題になる“切れやすい”子どもも、言葉の意味を取り違えたり、言葉を字義どおりに理解しており、皮肉や冗談が通じない子どもである。発達障害として括るのは簡単なことだが、それだけでは解決にはならない。一人ひとりが異なる特徴をもつことを理解して、その子どもに合った対応が必要である。子どもは変化しているし、育てている大人も変化しているという前提で対応することが大切ではないだろうか。

心に残るひとこと

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行



お年寄りに席を譲ることは親切か

このように問われて、NO と答える人は少ないであろう。基本的に席を譲ることはよいこと、親切なことである。では、

譲ろうとしたけれど、思い切って声をかけられなかった。この人は親切か。

このように問われたらどうであろうか。これは賛否が分かれる。実際、現場の先生方に聞いたことがあるが、「親切である・ない」の数は、ほぼ同数でなおかつ少数、ほとんどの方は「どちらともいえない」と答えた。

実際問題として、この問いに対する普遍的な答えはない。状況によって変化するからである。しかし、子どもたちに同じ質問をすると、ムキになって答えようとする。

「譲れなかったけど、譲ろうとする気持ちがあったのだから、いずれは譲れるようになる。だから親切だ」と言う賛成派の子どもがいるかと思うと「何もしていないのだから親切ではない」と言う反対派の子どももいる。「親切とはどういうことか」という定義も曖昧なまま議論をしているのだから、ある意味いい加減なものである。

そのうち、賛成派から「座りたくない人にも席を譲るのが親切なのか」という反論が、反対派に対してなされた。反対派は「それも親切だ」と言う。結果的に相手に楽をさせてあげているのだから、きっと後から感謝してくれると言うのである。賛成派から一斉に「え〜!?」という声が広がる。

ここでこんな新聞の投稿を紹介するとおもしろいかもしれない。

私は譲られた席は、座りたくなくても座るようにしている。それが相手に対する思いやりである。

せっかく席を譲ろうと勇気を奮い起こしてくれた人に対しては、感謝の気持ちでこれを受け取ろうというのである。こうなってくると、席を譲る方より譲られる方に思いやりが求められることになってきて、何が思いやりで何が親切かわけがわからなくなってくるかもしれない。

私のクラスのT君が、転んで手を骨折してしまった。まわりの子どもたちは、T君の手の代わりに自分たちができることを考え、みんなで手分けをしながら手伝った。もちろん、T君が自分でできることは自分でさせてあげられるように配慮しながら。道徳の時間に、折しも思いやり・親切の学習をした。その時にT君はこんなことを書いてきた。

今日のクリスマス会で、Yちゃんと先生が、4年生とのクリスマス会に出られなかったぼくの気持ちを考えて、ケーキを用意してくれました。だれかが同じように困った時は今の気持ちをわすれずに、その人のことを一生けんめい考えてあげたいと思います。

T君が自らの体験を通して考え、見つけ出した価値観である。冒頭の問いの答えとして子どもに示す言葉が何かあるとしたら、私はT君の言葉を使う。確実に一つの強いメッセージ性をもって聞く人の心に響くであろう。